

学んだことはいつ役立つかわからない 影山さん

どのように働きたいか明確にすることが重要 新井さん

「金融業界は厳しい」。長引く不況でそう語られるようになって久しくなりました。それでも漠然とした憧れを捨てずに金融を目指したのは、厳しい時代だからこそ、その状況を耐え抜いて自分を伸ばすことが大切なのではないかと考えたからです。

金融業界は試験をパスしないと担当できない業務が数多くあり、自らスキルアップする意欲が求められる職場です。採用試験の過程でこの人は凄いな、こんな風になりたいなと感じる行員がたくさんいました。「この人たちが働きたい」と強く感じる会社に出会ったらその勘は大切にしたいと思っています。1年経ってその勘は間違っていないかと実感しています。

入社後3カ月ずつ窓口、融資、

センパイからのアドバイス!

平成14年3月
法学部経営法学科
(現企業法学科) 卒
影山 雄平さん
みずほ銀行
千葉支店



企 業のトップと経営事情など根幹部分を話せる醍醐味に憧れ金融業界に。

入学後のキャリアは各自で築く。外為、接客の研修を経て、渉外担当に本配属となった。

現在の業務は顧客への貸出、貸出後のフォローなどです。企業を成長させるために必要な資金繰りの提案から個人ローンの相談まで幅広く対応します。それぞれの企業に必要な情報を提供し、頼れるアドバイザーにならなければなりません。

そのため各業界の情報収集は欠かせません。新聞、ビジネス誌、現場の声、日々お客様と話すこと。全てが勉強です。就職を意識した皆さんにお勧めするのは日経新聞。就職活動前から目を通しはじめ、付け焼刃でない読み方を身につけてください。

入 行後のキャリアは各自で築く。グループ傘下には証券、信託銀行等もあり、どの分野への異動も可能です。私もどのようなキャリアを築くか模索中です。多様なことに対応できるゼネラリストでありながら、スペシャリストと呼ばれる分野を構築したいですね。

学 んだことはいつ役立つかわからない。

私は法学部出身で、当時は法律をあまり身近なものと感じることもないまま授業を聞いていました。社会に出ると、この法律は押さえておくべきだったと思うことが非常に多く、改めて法律の重要性に気付きました。

学んだことがどんなチャンスに結びつくかわからない。常にそういう気持ちで授業に臨んで、興味・裾野を広げていってください。

先輩の働く世界をのぞいてみよう



今月から各キャンパスでは3年生向けに就職準備セミナーが開催されます。積極的に参加し、今後の就職活動の参考にしてください。今回は、それに先立ち、各分野から就職して2~5年目の先輩方に現在の仕事について聞きました。

民間企業への就職活動から公務員志望に切り替え、卒業1年後に、希望分野の中枢に飛び込んだ新井さん、いったん就職したものの、子どもの頃からの夢を諦めきれず、再度挑戦して希望する雑誌の編集職に就いた木村さん…。どの先輩にも共通していることは、みなやりたいことをしっかりと掴んでいるということです。これは就職活動中のみならず、就職してからも変わりません。これから就職を考える皆さん、自分が本当にやりたいことは何かをじっくり考え、どうすればそれに近付けるのか、先輩方の体験談、学内セミナーなどを大いに活用し、これからの就職戦線を読み切ってください。

雇 用問題、年金制度、SARSなど、山積された課題に対する政策を担当するのが厚生労働省だ。

学生時代の様々なアルバイトを通じ、職種によって勤務環境が大きく異なることを知り、法律の中でも働き方にまつわる問題に関心が高くなっていききました。長く働くためには公務員がよいのではないかと考え、労働問題の中枢、厚生労働省への入省を志しました。

一年目は労働基準局で行政の電子化に伴う地方システムの構築を担当した。しかし今年4月、思いもよらず副大臣へ異動に。

現在の業務は副大臣の一日の流れをサポートすることです。省の各局のラインを外れ、突然厚生労働省の中枢に来たことに大きく戸惑いましたが、厚生労働行政の全体像が見える場にいることに気持ちを引き締めています。

センパイからのアドバイス!

平成13年3月
法学部法律学科卒
新井 紀子さん
厚生労働省
副大臣室



雇 用問題、年金制度、SARSなど、山積された課題に対する政策を担当するのが厚生労働省だ。

緊急の対応を迫られることも多く、仕事は深夜に及ぶことも。当省の現在の最優先課題はやはりSARSですが、その他にも一刻を争い、決断を迫られる課題が目白押しです。「労働環境をよりよくするための行政」を扱っているのに職員は深夜に及ぶ残業も少なくない現実(笑)。公務員は9時5時というイメージもあるようですが、霞が関は眠ることがありません。

一 口に公務員といってもその働き方は多種多様。公務員志望者の方は、まずはどうのように働きたいか明確にすることが重要です。国家公務員でも国の政策に関わりたくいか、身近なサービスに携わりたくいかでは大きく異なります。

これから就職を考える皆さんは4年間で残ったものは何かをはっきり答えられるような学生時代を送るよう心がけてほしいですね。

センパイからのアドバイス!

平成11年3月
工学部電気電子工学科卒
安藤 誠さん
日本電気エンジニアリング(株)
第一システムソリューション事業部
アプリケーション開発部



IT パブルといわれた時代もいまは昔。IT不況と現在の電気通信業界は分社化やリストラといった大きな構造改革を終え、新たな創造の時代に入った。

当社は以前はNECからの受注がほとんどでしたが、これからは自社独立の形で売れる商品提案していくことが求められています。

大学時代はソフトウェアとは無縁の研究をしていましたが、開発をしたかったので入社してソフトウェアについて一から学びました。

学生のうちから努力する癖をつけておくと社会に出てから楽ですよ 安藤さん

1年目は消防システムで使用するデータのエラーをチェックするアプリケーションの開発を担当。はじめて納品した時はドキドキしましたね。作ったソフトがうまく動かずに失敗作だったらどうしようと眠れなかったこともありましたよ。

現在は防災システムの構築や新たな通信網「ボイス・オーバーIP」に付帯するサービスアプリケーションの開発等を手がけています。その中で特に災害時に必要な回線の確保をする防災システムや、救急の連絡がセンターに入ると住所や世帯主などが即時に表示される消防署の指令システムのアプリケーション開発などの業務に携わっています。

立ち止まるとあつという間に時代から遅れていってしまうことを意識させられる毎日です。半期ごとに所属長と面接し、現在の仕事のやりがいや目標を自己申告する場があり、叱咤激励を受けながらがんばっています。今後はコンピューター関連の各種資格を取得していくつもりです。

入社してからやる気に勝るものはありません。学生のうちから努力する癖をつけておくと社会に出てから楽ですよ。

就職課より

就職活動を始める前に考えるべきこと、やるべきこと

卒業生からのメッセージ。3年生の皆さんは、どのように受け止めましたか？どの先輩もそれぞれの分野で、着実に「自らの道」を歩き始めている様子が眼に浮かびます。輝き始めた先輩たちからの言葉をヒントに、秋から始まる本格的な就職準備活動の前、特に時間的な余裕のある夏休み中に考えるべきこと、やるべきことを整理しておきましょう。

就職試験の面接で聞かれることは二つしかないと言っても過言ではありません。ひとつは、「学生時代に何をしてきたのか」、そして「入社して何をしたいのか」。この質問に適切に答えられることが、就職活動の成否を大きく左右します。

やりたい仕事（入社後、やりたいこと）がはっきりしており、そのための努力をしてきた人は、迷うことはありません。そのまま続けましょう。やりたいことあるけれど、必要な準備をしてこなかった人。この夏が最後のチャンスです。アクションを起こしてください。

ところで、「やりたいこと」と「できること」は違います。意欲だけをアピールしても、採用担当者からは必ずしも評価されません。この学生は「できるかもしれない」という可能性を評価してもらい必要があります。そのために必要なものが、「学生時代にしてきたこと（実績）」です。まだ、実績不足だなと感じているならば、この夏休みを機会に挽回しましょう。

では、何が実績として評価してもらえるのでしょうか。例えば、「映画が好きで、映画配給の仕事がしたい」学生がいたとしましょう。アルバイトで稼いだお金は全て映画のため。月10本以上は映画を観て、その都度、映画の批評だけでなく客層や劇場の雰囲気などを細かくノートに記録。地元の小さな映画イベントにボ

ランティア・スタッフとして参加していたとしたら、この学生に魅力を感じない採用担当者はいないと思います。

とはいえ、ここまでなら、ありそうな話です。注意して欲しいのは「やりたい」というだけでは十分ではないことです。映画配給もビジネスです。事業として成立させるためには、単なる映画好きな学生だけを採用するわけにはいきません。一本の映画を配給するためには、多くの関係者の利害関係を調整していかなければなりません。そのような仕事していくのに、「人に頭を下げるのは嫌いだ」と思っている人や「この映画の良さがわからない人の気がしれない。説明するのは面倒だ」と考えてしまう人が向いていると思いますか？答えは、間違いなく「ノー」です。しかし、「詳細な記録を残す」とか「(ボランティアとして) 労を惜みず動ける」といった実績をアピールすることで、違った道(業界・企業・職種)が拓けるはず。

誰もが好きなことを仕事にしたいと願っていると思います。でも、仕事として出来るか否かは、「好き」とは違った要因もあることを理解しておきましょう。見方を変えれば、社会人としての必要な資質を備えていれば、たとえ、映画好きでなくても映画配給の仕事は出来るということ。多くの採用担当者の方々が、「仕事に必要な専門的な知識は、仕事の中で覚えることができる。大切なのは、『学ぶ』習慣を、学生時代を通して身につけ、実践してきたかどうか。」と異口同音に口にされています。この意味を、よく考えてみましょう。この言葉の中に、どの企業にも共通している「人材観」が凝縮されています。

さて、将来の仕事を考えるとき、やり

たいことを挙げていくことは楽しいと思います。しかし、社会人への最終的な準備段階に入った皆さんにとっては、これだけでは十分とはいえません。不必要に自らの可能性を否定することも困りますが、夢を見ているだけでは何も始まりません。

中には、まだ自分が何をやりたいのかわからない人もいます。そんな人は、自分がやりたくないことを、まず挙げてみるのも、一つの方法です。絶対にやりたくないこと以外は、「仕事」として考えられるのではないのでしょうか。やりたくない理由を考えることで、反対に、やれる(かもしれない)仕事の範囲を広げられると思います。

最後に、就職試験のための準備(勉強)も大切ですが、秋までに「自分にとって仕事とは何か。」をじっくりと考え、自分なりの答えを出しておいて欲しいと思います。その答えが、皆さん一人ひとりにとって、これから始める職業人としての原点になります。原点がしっかりしていれば、就職活動の中で迷うことはないはず。

就職課長 山本繁樹

●ご意見ご質問は以下へ
E-mail:shoku@hakusrv.toyo.ac.jp
メールには氏名と学部学科を明記して下さい。




OB、OG訪問は必ずやっておいたほうがいい 関口さん

学生時代は様々な経験を積んでおくことが大事 木村さん

経 濟不況、世界各地でのテロ、戦争、SARSなど、社会の情勢に大きな影響を受ける旅行業界。旅行会社は自社の得意分野を伸ばす努力を始めている。近畿日本ツーリストでは、クラブツーリズムという部署があるのですが、旅行を提供するだけではなくイベントなどの提供もすすめています。ツアー参加者同士が仲間になっていく、クラブを作るお手伝いといった所でしょうか。クラブが作られることによって、参加したお客様が仲間になっていく、そしてそのお客様がリーダーになって他の友達を連れてくるといった具合です。私がクラブツーリズムに配属された2年間は、先輩が企画したツアーの全体像から目的地までの食堂やお土産屋の手配や、添乗員への連絡、指示書の作成など手配者と呼ばれる仕事をし

センパイからのアドバイス!

平成13年3月
法学部法律学科卒
関口 和郎さん
近畿日本ツーリスト(株)
クラブツーリズム



てきました。添乗員としてツアーに同行することもありますが、添乗をしていると、様々な人と出会うのがとても楽しみな事だし、そしてツアー終了時、お客様から感謝の言葉をいただいたときが何より幸せな瞬間です。いよいよ3年目にして念願の**企画発案**を。最初の頃の添乗員として大変だった経験や渋滞情報を把握して旅行行程を管理するなど、現場を経験したことがとても役に立っています。お客様の満足度が100点満点で評価されるツアーアンケータの結果のコメントを見ると、今までは値段が安い方が集客できていたのですが、最近では食事にしてもホテルにしても多少値段が高くて、ある程度のグレードであった方が集客できるようになってきている気がします。今入社して思うことは、入ってからギャップがあるのでOB・OG訪問は必ずやっておいたほうがいいと思います。最初から自分で色々なツアー企画を作った風に出している学生も多かったりしますが、実際は企画されたもの手配から始まり、添乗員業務もしていきます。そのような仕事があったら始めてツアーは企画できるのだと感じています。


最後に、どの様な場においても、どんな仕事に就いても、楽しむ事を忘れないでください。楽しく思えればそれ相応の結果がでてくるものです。

4 月から念願の少年漫画誌「月刊少年マガジン」編集部配属され、「鉄拳チンミ」など人気作品を担当。ストーリーづくりなど漫画家との打ち合わせをはじめ、扉絵のキャッチコピーや巻末の文章をまとめるのが主な仕事だ。

子どもの頃からおたくといわれるくらい漫画好きでした。在学中はマスコミサークルに所属し、就職活動は出版・放送・新聞等数社を受験。金融専門紙の記者に採用され、やりがいがありました。漫画の編集をする夢を諦めきれずに再度挑戦し、編集プロジェクトに採用となりました。記者としての経験は今の仕事に大いに役立っています。配属先の「月刊少年マガジン」は116万部と月刊少年誌で日本一の発行部数を誇る人気雑誌。「こういう漫画を作りたい！」

センパイからのアドバイス!

平成12年3月
文学部国文学科
(現日本文学文化学科)卒
木村 俊彦さん
講談社
月刊少年マガジン
編集部



僕は会社に行くのが楽しくて仕方がない。漫画は好きで読んで、漫画家と打ち合わせを通じてストーリーづくりにも参加できる。様々な年代層からの読者の反響に直接触れることができるんです。

全国から多くの漫画原稿の持ち込みがあり、彼らに会って、アドバイスをし、長い目で育てるのも編集者の役目だ。

目をかけている新人さんが何人かいます。5年くらいかけてデビューさせるつもりで、じっくり育てていきたい。いまは先輩編集者と人気漫画家を担当していますが、いつか自分が見つけた新人を一から育てあげて有名な漫画家になることが夢ですね。

という具体的な企画書を作って、面接でアピールしたのがよかったです。『好き』という気持ちが何より大切です。自分が何をやりたいかをまず考える。そのために、学生時代は様々な経験を積んでおくことが大事ではないでしょうか。

学生時代は様々な国を旅行し、中国武術をはじめ、テニス、サッカー、スノーボード、釣りなどに取り組みました。実は中国武術をはじめたのは漫画の影響(笑)。それが縁で『鉄拳チンミ』(格闘家が主人公の冒険アクション)の担当になったのですから面白いものです。

「まさに『好きこそものの上手なれ』。